

本を選ぶ

NO.440 2022年(令和4年)1月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>乳香

●鳥の目 87

●図書館を離れて (第56回)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

乳香

年明け、松のとれぬうちに各地に雪が降った。庭のティーツリーに降り積もり、重みで枝が大きくなったわんでしまった。オーストラリア原産のこの木の枝は案外ねばりがなく破折しやすい。が、幸い翌朝には融けて落ちてくれた。夏にはこの雪のように白く煙のような花を咲かせる。針状の葉を揉むとさわやかな香りを放つ。また、葉の一部から抽出された精油を皮膚の抗菌・消毒などに用いると聞く。先住民アボリジニはその性質を知っており伝統的に活用してきたらしい。

雪かきが終わったところで、暮れに友人が送ってくれた音楽CDを聞いてみた。ヴァイオリンを中心とした弦楽アンサンブルの音楽は演奏もふわっと柔らかく、ゆったりしたもの。トップの曲には<朝のフランキンセンス>とのタイトルが付いている。楽曲の解説を読むと「春に行く予定だったオマーン。…中略…フランキンセンス(乳香)をお土産にしようと思っていました」とある。

<フランキンセンス>をオマーンでの演奏旅行の土産にする？ はて、どんなものなのか。当初<乳香>でもすぐにはぴんと来なかったが、何となく記憶にあるような気がする。朝日新聞朝刊の池澤夏樹の連載小説『また会う日まで』に目を通していう

ちに思い出した。聖書だ。イエスが馬小屋で生まれた際、東方から星に導かれてやってきた博士たちがささげた贈り物として登場する。“黄金・乳香・没薬”。(「マタイによる福音書」2.11) さらに創世記をめぐってみるとやはりあった。(37章と43章) 調べれば、遙か以前より中東では稀少な香として珍重され、宗教儀式には聖なる香として欠かせないとわかった。乳香は主にオマーンに生息する木から採取する樹液が空気に触れて固まった樹脂である。近年さかんになったアロマセラピーでは必ず使われる精油としてその効能を謳っている。アロマセラピーとは1928年にフランスの化学者ルネ＝モーリス・ガットホセが、香気成分が心や身体の不調などを穏やかに回復し、健康増進に役立つ自然療法として「アロマセラピー」を造語して提唱したのが始まりだ。

キリスト教の巡礼路の終着点として知られるスペイン北部のサンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂では、数百年前から続く宗教行事でボタフメイロと呼ばれる巨大な香炉を振り回して、焚きしめられた乳香の甘やかな匂いが聖堂内全体に降り注ぐという。蛇足ながら、オマーンの乳香もサンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂もいずれも世界遺産に登録されている。

あれこれ文献を検索しているうちに、フランキンセンスとティーツリーが共通の香気成分を多く有しているという論文に遭遇した。(岡山大学農学部学術報告 Vol. 107, 1-3 (2018)) 単なる偶然とは言え、実際に匂いを感じないままその香気成分の働きかけを受けたかのような気分になった。(埜村 太郎)

ある話題から

2021年2月から近所のシニア5名で毎月1回、「日本の近現代史をやさしく原典で読む」と名づけた勉強会を始め、「慶安御触書」から百姓一揆、鎖国政策など幕藩体制の政治・経済史、また江戸の思想史では林羅山、本居宣長、平田篤胤、安藤昌益さらに会沢正志斎など水戸学のアンソロジーを拾い読み明治維新に近づいています。

ところで晩秋の勉強会である会員から最近の環境変化や気候変動が野鳥にどのように影響しているのかと尋ねられました。勉強会は本題から離れ公園や庭先で見られるスズメやシジュウカラ、秋に飛来するツグミやジョウビタキが話題になりました。ニュースで知る季節の鳥の情報による一般的な印象では答えになりません。そうした折、新聞が報じた10月25日環境省発表の全国鳥類繁殖分布調査報告が目にとまりました。

この全国調査は第1回が1974年から1978年、第2回が1997年から2002年の期間に、野鳥281種（亜種3種を含む）について調査が行なわれ、絶滅危惧種の選定や環境影響評価（アセスメント）などの基礎データとして活用されていきました。それから10年ほどして3回目の調査の検討がはじまったころ環境省は本調査に消極的姿勢になったと言われます。

これに対しNPO「バードリサーチ」（東京都）は「調査の継続による定期的な変化の記録」の意義の重要性を主張し、「日本野鳥の会」など4団体に呼びかけて調査会を結成し、ボランティアで2016年から調査を始め、今回の第3回の調査結果に至りました。調査は全国を20キロ四方のマ스에区切り、一マス毎にその区域を代表するコースを選定、見かけた鳥や鳴声を記録し、繁殖する可能性の高い順に5ランクに分け、生息状況进行评估します。今回の調査では、選ばれたコースは2344地点、距離約7000キロ、調査員2106人で6年がかりで、冬鳥や旅鳥を除く379種の鳥類の情報が記

録されました。

環境省の鳥類の全国調査にはその他に、1970年から始まった毎年1月全国一斉に実施されるガンカモ類の生息調査があり、私も1980年代から2020年まで埼玉県での調査に毎年欠かさず参加してきました。また1984～85年に実施された環境庁（当時）の第3回自然環境保全基礎調査の鳥類調査には、調査区域のメッシュを渡されて参加した懐かしい記憶があります。

増えた鳥と減った鳥

野鳥の観察会参加もままならない老身には、今回の環境省の全国繁殖調査は大きな関心もたれますが、本調査では対象外の冬鳥も気になります。

この繁殖調査では、まず身近な鳥の減少が明らかになりました。例えばスズメは2回目の調査の3万1159羽から今回の2万627羽へと3割以上も数を減らしています。また繁殖が確認されたAランクの地点は1回目に比べ2割減少しています。ツバメも減少のグループに入り、2回目の1万4978羽から8987羽へ実に4割減です。スズメもツバメも意外にも農地の割合が高い場所ほど減少率が顕著でした。その理由として農地で餌になる虫が減った影響が出ている可能性が指摘されています。農地の管理が行き届いたということでしょうか。スズメもツバメも農家とは繁殖場所として深い繋がりありましたが、それも失っているようです。農家の軒先の瓦の隙間のスズメの巣や土蔵の軒下に張りつけた徳利形のコシアカツバメの巣は今ではめったに見かけなくなりました。西日本に多いコシアカツバメは観察地が減少した15種に入っています。

ムクドリもこれまた意外にも4割近く減少していますが、これは本来ならすみかであるはずの農地で大きく数を減らしたため、スズメやツバメと異なり街路樹の果実も餌になるため、都市に遍在するようになったと説明されています。

一方、森林をすみかにしている野鳥が増加している傾向が指摘されています。希少種のキバシリ、サンショウクイ、サンコウチョウが1990年代に比べ今回は3倍、2倍半、2倍とそれぞれ増加しているのは嬉しいことですが、林業の衰退などで雑木林が手つかずで、鳥の生息に適した環境になった可能性があると言えれば複雑な気持ちです。

森林性の鳥のV字回復は東京都の1970年代、1990年代の鳥類繁殖分布と今回の調査の結果からも見られ、ヤマガラ、メジロ、コゲラなど疎林の小鳥が3期を通じて増加し、キビタキやサンコウチョウなどの夏鳥やアオバト、ヤマドリや大型キツツキなどの留鳥の増加が報告され街路樹や公園の樹木が成長し「都市の森林化」といった状況が生まれています。都市型鳥類の出現については1980年代から指摘されていましたが、都市に集中したハシブトガラス、ムクドリや野生化したインコ類などの繁殖も今後の都市の変容と温暖化の影響が注目されます。

日本列島の冬の小鳥

鳥類繁殖調査では当然ながら冬鳥などの渡り鳥は対象外です。日本で冬を過ごすシベリアなど極東・極北の鳥たちの顔もそろそろ季節となった頃、先の勉強会で一冊の鳥の本『クマさんの野鳥日誌』（写真・文 熊谷勝／青葙社／2021年）を頂きました。作者の熊谷さんは北海道室蘭に住む自衛隊写真班出身の野鳥を主としたカメラマンです。本書では、四季の44種の鳥が水彩画の世界のような様々な季節の色を背景にして羽ばたき、懸命に轉り、自然と小鳥たちの美しいハーモニーが奏でられています。

熊谷さんが撮影の主なフィールドとする室蘭絵柄半島は北海道と本州を移動する渡り鳥の中継地です。絵柄半島に初秋の風が吹き始める8月下旬、早くも南を目指す渡り鳥たちが半島の森や平原に姿を見せ始めます。北海道ではヒヨドリは渡り鳥で、10月中旬ごろから絵柄半島の岬から対岸の渡島半島の駒ヶ岳方面へ渡る数百、数千の大群は圧巻です。ヒヨドリたちはハヤブサの襲撃を知っており海上に出ると海面すれすれに飛び犠牲を少なくしますが、この攻防は11月末まで続きます。

日本列島に秋渡来するツグミは小鳥の渡り鳥の代表格です。熊谷さんによるとツグミは「クイ、クイ」とかん高い声を出して、北海道に本格的な冬の到来を告げる鳥だそうです。ツグミはシベリアから渡ってくる冬鳥で、北海道では多くは本州方面へ南下する途中で、一部は北海道で越冬し、厳冬期には街路樹のナナカマドの赤い実を食べる淡い褐色の眉斑で暗褐色の翼と背、白い腹に黒斑があるムクドリ大のツグミが街中でも見られます。ツグミはロシア極東では北極圏のコルイマ川低地からオホーツク海南西海岸、カムチャツカ半島までのシベリアの広範囲の地域で繁殖し、極東や東アジアの各地で越冬、日本へも大挙飛来します。西高東低型の冬の気圧配置に変わる10月頃、大陸から日本列島へ吹く季節風に乗って冬鳥の飛来が本格化します。戦前からこの渡りの季節は日本列島は霞網猟のシーズンに入り、命がけの厳しい「荒野」が待ち伏せていました。鳥屋猟場ではツグミをはじめアオジ、アトリ、カシラダカなどの小鳥が大量に捕獲され、戦後1947年ツグミなどの霞網捕獲が禁止されますが、80年代までは年間推定400万羽に及ぶ密猟が横行しました。

それゆえこれらの保護のためにもツグミなどの小鳥がシベリアから日本列島に飛来し、国内に拡散するフライウエイに関心ももたれてきました。その主な渡来コースはロシア沿海地方→日本海横断→能登半島というのが定説でしたが、そのほかツグミ、カシラダカ、マヒワなど冬の小鳥がカモ類やハクチョウ類と同様シベリア→サハリン→北海道→本州のコースをとり、またマガン、オナガガモ、コガモ、オオハクチョウなどがカムチャツカ半島やアリューシャン列島から千島列島を経て北海道へ飛来することが判明しました。（『渡り鳥の世界』中村司著／山梨日日新聞社／2012年）

かつてモスクワ近郊の秋の渡りのしんがりは街のナナカマドが実る降雪の頃までのノハラツグミで、越冬組もいたといえますから、シベリアでも地球の温暖化でナナカマドなど木の実が熟す時期が変動し、日本への小鳥の渡りの出発時期や移動数を左右することもあるかと想像されます。

（ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会）

図書館を離れて (第56回)

—時代小説の中のお仕事女子④—

並木 せつ子

前回は親も医者という正統派ばかりだったが、今回は「小説とはいえそんなことが？」と思うような個性的な医者ばかりである。

和田はつ子の『お悦さん』は付添人世話所「清悦庵」の主。庄屋の娘だったが駆け落ちをして捨てられ、江戸で付添人の仕事をしたのち医者になった。時には人に言えないような仕事もやったという苦労人である。本道（内科）も外科も診るが難しい出産に立ち会うことが多い。また当時の常識とされていたお産に関する悪習——腹をきつく締めあげる腹帯や、産椅子（産後も横にならず座っていた）をやめるよう啓発にも力を注いでいる。これは実在する産科医の賀川玄悦（1700～1777）が説いていた説なので、作者は玄悦からお悦という人物の構想を得たのではないだろうか。お悦は事件に巻き込まれれば柔術を使い、危機一髪ときは偉い典薬頭が登場する。柔術は治療に役立てるために学び、典薬頭とは若い頃恋人同士だったらしい。それほど年でもないのに、なんと多くの経験をしてきたのだろう。いつの間に医学を学んだのだろう。お悦の人生は謎と波乱だけである。

謎と波乱なら、あさのあつこの『闇医者おゑん秘録帖』も負けてはいない。おゑんは腕利きの闇医者——生めない事情の子どもを身ごもった女のための医者である。北国の小藩に生まれた。そこは海に面していて、海が荒れた翌日など異国の人が浜辺に打ち上げられ、まれに住み着くことを許される者がいた。おゑんの祖父はそうした者の一人で、遠い北の国の船医だった。その船医は小藩の娘と結ばれ、やがておゑんの祖父となる。おゑんには「独りで生きる術を能う限り手渡そうと」書を読ませ、医術の技や薬の知識を教えた。あわせて「人が生きていくうえで入り用なのは……草々のしぶとさ」だということも。その後一家は惨い運命に翻弄され、おゑん一人が残された。今は幼い頃からの使用人である末音と江戸で生きている。末音も祖父と同様、海岸に流れ着いた異国の女だった。

おゑんのもとには、女が一人で、または親に連れられて、人目を忍んでやってくる。おえんはすぐに施術することはしない。生むかどうかを、親でも相手の男でもない、女自身に尋ねるのである。「この先、生きていく途を決めるのはあんた、…それができないと、いつまで経っても泣くことしかできない女になっちゃう」と自分で考えるよう促す。生んでも育てられないときは、おゑんが面倒を見て養い親を探す。だからこれまでに、ここで生まれた赤子の秘録帖がちゃんと残っている。生むにせよ生まぬにせよ、ここは女たちが「生きるためにやって来る。生きて明日へと足を踏み出すために訪れる」場所なのだ。同じ作者による『おいち不思議がたり』では、医者になりたいとまっすぐに進んでゆく、まぶしいようなおいちが描かれていた。おゑんは「光だけで、……この世が成り立つわけありません」と言う。一見対照的な二人だが、命を救いたいという強い気持ちは同じである。同じく闇医者なのが『女医者おげん謎解き控：赤い闇』（川田弥一郎著）のおげんで、長崎の遊女とオランダ人の間に生まれた。お悦、おゑん、おげんは「お仕事女子」のイメージからは少し離れるが、自立した人間の持つきりりとした魅力がある。

『祇園よしやの女医者』（藤本登四郎著）は、宝暦元（1751）年から50年続く祇園のお茶屋の娘・月江が主人公。今は舞妓として活躍中である。祖母の代から続いてきた「よし屋」の跡を継ぐものとして育てられたが、顔なじみの医者・源齋は学問好きな月江を医者に育てたいと申し出る。母親は大反対だったが、舞妓の仕事と源齋の手伝いを1日おきにする、という約束で譲歩した。二つに分かれた道の前で月江の気持ちは揺れ動きながらも、よし屋の女将になるのが自らの定めと覚悟していた。しかし源齋のもとで、心を病む患者の治療を手伝ったことから意外な方向に展開してゆく。医者への道の入り口に立ったばかりの月江だが、医者になりたいという強い意志が、読み手側に伝

わってこないのはもどかしい。

『お江戸やすらぎ飯』（鷹井伶著）の佐保は幼い時に大火で両親とはぐれ、自分の名まえ以外の記憶をすべて失った。吉原の遊郭の主に引き取られ下働きをして育ったが、いずれは遊女になる定めだった。しかし不思議なことに佐保には人に足りない栄養を見抜き、それに対して効用のある食材がわかるという能力があった。たまたまそれを目にした医師の多紀元簡（たきもとやす）は、その能力を惜しみ多紀家に来るよう勧める。そして佐保は多紀家にひきとられ、下働きや食事作りの手伝いをしながら医学も学ぶようになった。さてどんな医療者になるのか、シリーズは継続中である。また作中に登場する元簡の弟・元堅（もとかた）は大福好きのひょうきん者として描かれているが、資料によると日本の医療史に名を残す人物だとか。多紀家も医学館を設立するなど漢方医学の名門だったということである。

脇役ではあるが紹介しておきたいのが『本所おけら長屋』（畠山健二著）のお満一薬種問屋の娘と、前回の『藍染袴お匙帖』で千鶴の助手をしていたお道一呉服屋の娘である。ともに大きな商家の娘でありながら医者を目指して修業中という変わり種。どんな医者になるのか楽しみである。他には『むすび橋』（五十嵐佳子著）の結実が祖母の下で産婆見習

い中。この「産婆」という言葉だが、「取り上げ婆」の時代はともかく、明治以降に法律ができてからも続いた。「婆」がとれたのは昭和23年「助産婦」になってからである。

たいていの作品で、女が医者になること、続けることの困難さについて言及しているが、実際に江戸時代を生きた女医たちにも同様の苦難はあっただろう。明治時代になっても女には医者への門が閉ざされていた。医学校への入学も医術開業試験受験も認められていなかったのである。日本最初の女医といわれる荻野吟子は、「女の医者は前例がない」という理由で医術開業試験の受験を断られ、『令義解』（833年）に記載されていた「女医」を前例として提出したという。こうした人たちのおかげで医者への道は開かれた。……が、現代を描いた小説『泣くな研修医③』（中山佑次郎著）の中にこんな場面がある。主人公・雨野隆治の頼りになる先輩で、女性外科医の佐藤玲は、渡米の決まった恋人・渋谷から、結婚して「アメリカに付いてきて欲しい」と言われる。佐藤に「仕事を辞めて家庭に入って欲しい」のである。佐藤は優秀な外科医で“外科医を辞めるということは人生に幕を下ろすのと大差ない”と考えているのだった。あくまでも小説ではあるが、いかにもありそうな話ではある。（なみき せつこ）